



古代文学における桃(二〇一三年度卒業論文要旨集)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学国語国文学会・札幌 公開日: 2014-11-11 キーワード: 作成者: 石岡, みさと メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007468

古代文学における桃

古典文学研究室 ○四〇九 石岡みさと

本研究では、古代文学における桃の特徴について、中国との違いや桃の部位に注目しながら明らかにすることを目的とした。時代別には、上代では実、中古では枝や花が中心であった。

次に役割ごとに見ていくと、桃の邪気を祓う霊力は、上代では主に実、中古では枝や木にあるとされ、花はない。記紀の後には『今昔物語集』まで見られないが、年中行事の卯杖・卯槌や、追儼（大儼）に用いられており、形式化されても、桃が霊力を持つという考えは続いていたと言える。薬用の桃もこれに近いが、日本では、中国の実や種等と違って脂を用いていた。

女性の比喩表現では、上代・中古共に実よりも花を取り上げていた。中国とは異なり、葉の比喩表現は見られない。また、不老長寿をもたらす西王母の桃も、比喩表現に用いられた。そもそも実であったが、花を取り上げることが主流になっていき、女性だけでなく男性にも用いて、稀少さや遅咲き、結実までに時間のかかることを強調していた。これらは、「成る・生る」「桃・百」「酸く・好く・食く」の掛詞や、「李・柳」ではなく「母子草・桜・梅」との対が見られる桃の和歌の特徴と関わりがある。異郷やその境界に在る物としては、上代では実、中古では花を取り上げていた。『遊仙窟』など中国作品の模倣と言える。

以上のように、桃は古代文学に様々に描かれたが、最古の『古事記』黄泉国訪問譚の桃には、全ての要素がそろっていた。